

# $G$ 集合の制限と誘導について

オ

2023 年 7 月 28 日

## 概要

$G$  を有限群,  $H$  を  $G$  の部分群とする.  $G$  集合と  $H$  集合の間の制限と誘導について紹介し, それらが関手として随伴の関係にあることを述べた. また, 随伴関手の基本的な事実を, 応用するものに限って簡単に解説した.

## 1 制限と誘導の定義

$G$  を有限群,  $H$  を  $G$  の部分群とする.  $Y$  を有限左  $G$  集合とし, その作用は  $\rho: G \rightarrow \text{Aut } Y$  で与えられているとする. このとき, 任意の  $g \in G$ ,  $y \in Y$  に対して, 誤解の恐がない限り

$$\rho(g)(y) = g.y = gy$$

と書くことがある. また,  $X$  は作用が  $\sigma$  である有限左  $H$  集合だとする. 以下, 特に断らない限り, 作用は左作用のみを考え, 単に  $G$  集合と言ったときには, 特に有限なものを指すことにする<sup>1)</sup>.

$G$  集合は自然な方法で  $H$  集合と見なせる. つまり,  $H$  の  $Y$  への作用を  $\rho|_H$  で定めることで,  $Y$  は  $H$  集合となる. このようにして定まる  $H$  集合  $Y$  を

$$\text{Res}_H^G Y \quad \text{や} \quad Y \downarrow_H^G$$

で表し,  $Y$  の  $G$  から  $H$  への制限 (**restriction**) と呼ぶことにする. また, 任意の  $G$  写像  $f: Y \rightarrow Y'$  は  $H$  写像  $f: Y \downarrow_H^G \rightarrow Y' \downarrow_H^G$  でもある. この  $f$  が  $H$  写像であることを強調するときには  $f \downarrow_H^G$  と書く.

逆に,  $H$  集合を  $G$  集合に自然に見なす方法を考える. まず, 簡単な場合として,  $K \leq H$  に対し,  $H/K$  を  $G$  集合に見なすことを考える. この場合, 任意の  $g \in G$ ,  $hK \in H/K$  に対して, 作用を自然に

$$g.hK := ghK$$

---

1) 以下の議論は, 無限群  $G$  や無限位数の  $G$  集合を含めて考えてもよいと思うが, ここでは慣れ親しんだ有限の場合に限定しておく.

と定めることができるが、このとき、 $H/K$  は明らかに推移的  $G$  集合である。よって、 $K$  の固定化群を  $G_K$  とすれば、 $G$  集合としての同型  $H/K \cong G/G_K$  が成り立つ。また、

$$\begin{aligned} g \in G_K &\iff g.K = K \\ &\iff g \in K \end{aligned}$$

ゆえ、結局  $H/K \cong G/K$  である。

以上の簡単な場合を踏まえて、一般の  $H$  集合を  $G$  集合に見なす方法を述べる。直積  $G \times X$  に対して、 $H$  の右からの作用

$$(a, x).h := (ah, h^{-1}.x) \quad ((a, x) \in G \times X, h \in H)$$

を考える。このときの  $G \times X$  の軌道全体の集合を  $G \times_H X$  と書き、 $(a, x)$  の軌道を  $(a, x)H$  と書く。先ほどの場合において、 $ah.h^{-1}K = a.K$  が成り立っていたことを踏まえると、このような集合を考えることが自然に思えるかもしれない。さて、 $G \times_H X$  への  $G$  の作用を定めるために、次の補題を準備する。

**補題 1.1** 任意の  $(a_1, x_1)H = (a_2, x_2)H \in G \times_H X$  と  $g \in G$  に対して、 $(ga_1, x_1)H = (ga_2, x_2)H$  が成り立つ。  $\square$

**証明** ある  $h \in H$  が存在して、 $(a_1, x_1) = (a_2h, h^{-1}.x_2)$  が成り立つ。このとき、

$$\begin{aligned} (ga_1, x_1) &= (ga_2h, h^{-1}.x_2) \\ &= (ga_2, x_2).h \end{aligned}$$

だから、 $(ga_1, x_1)H = (ga_2, x_2)H$  である。  $\blacksquare$

補題より、 $G$  の  $G \times_H X$  への作用を

$$g.(a, x)H := (ga, x)H$$

で定めることができる。この作用によって得られた  $G$  集合  $G \times_H X$  を

$$\text{Ind}_H^G X \quad \text{や} \quad X \uparrow_H^G$$

で表し、 $X$  の  $H$  から  $G$  への誘導 (induction) と呼ぶ。

誘導の簡単な例を一つ挙げる。

**命題 1.2** 任意の  $K \leq H$  に対して、 $\text{Ind}_H^G H/K \cong G/K$  である。  $\square$

**証明** 任意の  $(a, hK) \in G \times H/K$  に対して,

$$(a, hK) = (ah, K).h^{-1}$$

が成り立つから,  $G \times_H H/K$  の任意の元は  $(a, K)H$  ( $a \in G$ ) で表せる. さらに, 任意の  $(a, K)H \in \text{Ind}_H^G H/K$  に対して

$$(a, K)H = a.(e_G, K)H \quad (e_G \text{ は } G \text{ の単位元})$$

だから,  $\text{Ind}_H^G H/K$  は推移的である. また, 任意の  $g \in G$  に対して

$$\begin{aligned} g.(e_G, K)H = (e_G, K)H &\iff \text{ある } h \in H \text{ が存在して } (g, K).h = (e_G, K) \\ &\iff \text{ある } h \in H \text{ が存在して } gh = e_G, h^{-1}K = K \\ &\iff g \in H \text{ かつ } g^{-1} \in K \\ &\iff g \in H \cap K \end{aligned}$$

なので,  $(e_G, K)H$  の固定化群は  $H \cap K = K$  である. したがって,  $\text{Ind}_H^G H/K \cong G/K$  である. ■

また,  $G$  写像から制限の間の  $H$  写像が定まったときと同じように,  $H$  写像  $f: X \rightarrow X'$  からも, 誘導の間の写像  $\text{Ind}_H^G X \rightarrow \text{Ind}_H^G X'$  が定まる.

**補題 1.3** 任意の  $H$  写像  $f: X \rightarrow X'$  と  $(a_1, x_1)H = (a_2, x_2)H \in \text{Ind}_H^G X$  に対して,  $(a_1, f(x_1))H = (a_2, f(x_2))H$  が成り立つ. □

**証明** ある  $h \in H$  が存在して,  $(a_1, x_1) = (a_2h, h^{-1}x_2)$  が成り立つ. このとき,

$$\begin{aligned} (a_1, f(x_1)) &= (a_2h, f(h^{-1}x_2)) \\ &= (a_2h, h^{-1}f(x_2)) \\ &= (a_2, f(x_2)).h \end{aligned}$$

だから,  $(a_1, f(x_1))H = (a_2, f(x_2))H$  である. ■

**補題 1.4**  $f: X \rightarrow X'$  を  $H$  写像とする. 補題 1.3 より定まる写像

$$\text{Ind}_H^G f: \text{Ind}_H^G X \rightarrow \text{Ind}_H^G X': (a, x)H \mapsto (a, f(x))H$$

は  $G$  写像である. □

**証明** 任意の  $g \in G, (a, x)H \in \text{Ind}_H^G X$  に対して

$$\begin{aligned}\text{Ind}_H^G f(g.(a, x)H) &= (ga, f(x))H \\ &= g.(a, f(x))H \\ &= g.\text{Ind}_H^G f((a, x)H)\end{aligned}$$

が成り立つから,  $\text{Ind}_H^G f$  は  $G$  写像である. ■

ここまで与えた制限と誘導の構成は, 実は関手的である.  $G\text{-set}$  で  $G$  集合の圏を表すことにはれば<sup>2)</sup>, 次の命題が成り立つ.

**命題 1.5** 以下がそれぞれ成り立つ.

- (1) 制限を与える対応  $\text{Res}_H^G$  は  $\text{set}^G$  から  $\text{set}^H$  への関手である.
- (2) 誘導を与える対応  $\text{Ind}_H^G$  は  $\text{set}^H$  から  $\text{set}^G$  への関手である. □

**証明** 写像の合成と恒等写像を保つことを確認すればいいが, これは構成の仕方から明らかである. ■

ここでは,  $\text{Res}_H^G$  を制限関手,  $\text{Ind}_H^G$  を誘導関手と呼ぶことにする.

## 2 随伴関手

誘導関手と制限関手の間には, ある意味で良い対応が存在する. より具体的には, 誘導関手は制限関手の左随伴となる. このことを説明するために, 随伴関手の基本的な概念について簡単に紹介する.

**定義 2.1**  $F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}, G: \mathcal{D} \rightarrow \mathcal{C}$  を関手とする.  $C \in \mathcal{C}, D \in \mathcal{D}$  に関して自然な全单射

$$\varphi = \varphi_{C,D}: \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) \cong \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$$

が存在するとき,  $F$  は  $G$  の左随伴 (left adjoint), または,  $G$  は  $F$  の右随伴 (right adjoint) であると言え,  $F \dashv G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$  と表す. □

$\varphi$  の添え字は適宜省略する. ここで,  $C \in \mathcal{C}, D \in \mathcal{D}$  に関して自然とは, 任意の

2)  $\text{set}^G$  と表すこともある. こう書いたときには,  $G$  集合を関手  $G: \text{set} \rightarrow \text{set}$ ,  $G$  写像を自然変換に見なせることを強調していると思う. 一般に, 圈  $\mathcal{C}$  から圏  $\mathcal{D}$  への関手全体の成す圏を  $\mathcal{D}^{\mathcal{C}}$  と表す.

$f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, C')$ ,  $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(D, D')$  に対して, 図式

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) & \xrightarrow{\varphi_{C,D}} & \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD) \\ (Ff)^* \uparrow & & \uparrow f^*, \quad , \quad g_* \downarrow \\ \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC', D) & \xrightarrow{\varphi_{C',D}} & \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C', GD) \\ & & \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D') \xrightarrow{\varphi_{C,D'}} \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD') \end{array}$$

が可換になることを言う. ここで,  $f^*: h \mapsto h \circ f$ ,  $g_*: h \mapsto g \circ h$  である. 可換図式から, 任意の  $h \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$  と  $h' \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC', D)$  に対して

$$Gg \circ \varphi(h) = \varphi(g \circ h), \quad \varphi(h') \circ f = \varphi(h' \circ Ff) \quad (2.1)$$

が成り立っている.

**補題 2.1**  $F \dashv G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$  とし,  $\varphi: \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) \cong \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$  とする.

(1) 任意の  $C \in \mathcal{C}$  に対して

$$\eta_C := \varphi(1_{FC})$$

とおく. このとき,  $\eta := \{\eta_C\}_C$  は恒等関手  $1_{\mathcal{C}}$  から  $GF$  への自然変換である.

(2) 任意の  $D \in \mathcal{D}$  に対して

$$\varepsilon_D := \varphi^{-1}(1_{GD})$$

とおく. このとき,  $\varepsilon := \{\varepsilon_D\}_D$  は  $FG$  から  $1_{\mathcal{D}}$  への自然変換である.  $\square$

**証明** (2) は (1) の双対命題なので, (1) を示せば十分である.

任意の  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, C')$  に対して, 図式

$$\begin{array}{ccc} C & \xrightarrow{\eta_C} & GFC \\ f \downarrow & & \downarrow GFf \\ C' & \xrightarrow{\eta_{C'}} & GFC \end{array}$$

の可換性を示せばよい. これは,

$$\begin{aligned} GFf \circ \eta_C &= GFf \circ \varphi(1_{FC}) \\ &= \varphi(Ff) \\ &= \varphi(1_{FC'}) \circ f \\ &= \eta_{C'} \circ f \end{aligned}$$

から分かる.  $\blacksquare$

**定義 2.2** 補題 2.1 で定まる自然変換  $\eta, \varepsilon$  を, それぞれ随伴  $F \dashv G$  の**単位 (unit)**, **余単位 (counit)** と呼ぶ.  $\square$

式 (2.1) より, 任意の  $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$  に対して

$$\varphi(g) = Gg \circ \eta_C,$$

が成り立つ. また, 双対性より, 任意の  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$  に対しては

$$\varphi^{-1}(f) = \varepsilon_D \circ Ff$$

が成り立つ. したがって, 随伴を与える自然な全単射  $\varphi$  は, 単位と余単位によって具体的に表示できる.

逆に, 関手の組  $(F, G)$  に対して適切な自然変換の組  $(\eta, \varepsilon)$  を定めることができれば,  $F \dashv G$  が成り立つことを確認できる. このことを述べたのが次の定理である.

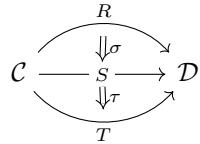
**定理 2.2**  $F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ ,  $G: \mathcal{D} \rightarrow \mathcal{C}$  を関手とする.  $F \dashv G$  であるための必要十分条件は, ある自然変換  $\eta: 1_{\mathcal{C}} \rightarrow GF$ ,  $\varepsilon: FG \rightarrow 1_{\mathcal{D}}$  が存在して,

$$\varepsilon F \cdot F\eta = 1_F, \quad G\varepsilon \cdot \eta G = 1_G \quad (2.2)$$

を満たすことである.  $\square$

証明の前に, 自然変換の垂直合成, 水平合成について述べておく.

図式

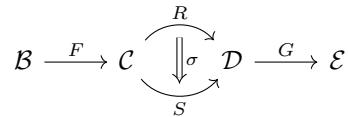


を考える. このとき, 新たな自然変換  $\tau \cdot \sigma: R \Rightarrow T$  が

$$(\tau \cdot \sigma)_C := \tau_C \circ \sigma_C$$

によって定まる. この自然変換  $\tau \cdot \sigma$  を  $\sigma$  と  $\tau$  の垂直合成 (vertical composite) と呼ぶ.

つづいて, 図式



を考える. このとき, 新たな自然変換  $\sigma F: RF \Rightarrow SF$ ,  $G\sigma: GR \Rightarrow GS$  が

$$(\sigma F)_B := \sigma_{FB}, \quad (G\sigma)_C := G(\sigma_C)$$

で定まる. これらの自然変換  $\sigma F, G\sigma$  を, それぞれ  $F$  と  $\sigma$ ,  $\sigma$  と  $G$  の水平合成 (horizontal composite) と呼ぶ.

**証明**  $F \dashv G$  だとし,  $\eta, \varepsilon$  をそれぞれ単位, 余単位とする. このとき, 任意の  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, C')$ ,  $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(D, D')$  に対して

$$\begin{aligned} (\varepsilon F \cdot F\eta)_C &= \varepsilon_{FC} \circ F\eta_C \\ &= \varphi^{-1}(\eta_C) \\ &= 1_{FC}, \\ ((G\varepsilon) \cdot (\eta G))_D &= G\varepsilon_D \circ \eta_{GD} \\ &= \varphi(\varepsilon_D) \\ &= 1_{GD} \end{aligned}$$

だから, 等式 (2.2) が成り立つ.

逆に, 自然変換  $\eta, \varepsilon$  が等式 (2.2) を満たすとする. このとき, 任意の  $C \in \mathcal{C}, D \in \mathcal{D}$  に対して, 写像  $\varphi_{C,D} : \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$ ,  $\theta_{C,D} : \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$  をそれぞれ

$$\begin{aligned} \varphi_{C,D}(g) &:= Gg \circ \eta_C \quad (g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)) \\ \theta_{C,D}(f) &:= \varepsilon_D \circ Ff \quad (f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)) \end{aligned}$$

で定める. このとき, 任意の  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(C, GD)$  に対して

$$\begin{aligned} \varphi_{C,D} \circ \theta_{C,D}(f) &= G(\varepsilon_D \circ Ff) \circ \eta_C \\ &= G\varepsilon_D \circ GFf \circ \eta_C \\ &= G\varepsilon_D \circ \eta_{GD} \circ f \\ &= f, \end{aligned}$$

が成り立つ. また, 同様にして, 任意の  $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$  に対して  $\theta_{C,D}\varphi_{C,D}(g) = g$  が成り立つので,  $\varphi_{C,D}$  は全単射であり,  $\theta_{C,D} = \varphi_{C,D}^{-1}$  である.

後は,  $\varphi = \{\varphi_{C,D}\}$  が  $C \in \mathcal{C}, D \in \mathcal{D}$  について自然であることを確かめればよい. 任意の  $g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(D, D')$ ,  $h \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(FC, D)$  に対して

$$(Gg)_* \circ \varphi_{C,D}(h) = Gg \circ Gh \circ \eta_C = G(gh) \circ \eta_C = \varphi_{C,D'} \circ g_*(h)$$

が成り立つから,  $\varphi$  は  $D$  について自然である.  $C$  について自然であることも同様にして分かる.

以上より,  $\varphi$  が随伴  $F \dashv G$  を与えていて, 単位, 余単位はそれぞれ  $\eta, \varepsilon$  である. ■

### 3 制限関手と誘導関手の随伴性

最後に, 誘導関手が制限関手の左随伴であることを確かめる.

**定理 3.1** 任意の有限群  $G$  と部分群  $H \leq G$  に対して,  $\text{Ind}_H^G \dashv \text{Res}_H^G$  である.  $\square$

**証明**  $H$  集合  $X$ ,  $G$  集合  $Y$  に対して, 写像  $\eta_X: X \rightarrow \text{Res}_H^G \text{Ind}_H^G X$ ,  $\varepsilon_Y: \text{Ind}_H^G \text{Res}_H^G Y \rightarrow Y$  を

$$\begin{aligned}\eta_X(x) &:= (e_G, x)H \quad (x \in X), \\ \varepsilon_Y((g, y)H) &:= g \cdot y \quad ((g, y)H \in \text{Ind}_H^G \text{Res}_H^G Y)\end{aligned}$$

で定めると, 自然変換  $\eta: 1_{H\text{-set}} \Rightarrow \text{Res}_H^G \text{Ind}_H^G$ ,  $\varepsilon: \text{Ind}_H^G \text{Res}_H^G \Rightarrow 1_{G\text{-set}}$  が得られる. これらが等式 (2.2) を満たすことを確認すればよい.

任意の  $H$  集合  $X$  と  $(g, x)H \in \text{Ind}_H^G X$  に対して,

$$\begin{aligned}(\varepsilon \text{Ind}_H^G \cdot \text{Ind}_H^G \eta)_X((g, x)H) &= \varepsilon_{\text{Ind}_H^G X} \circ \text{Ind}_H^G \eta_X((g, x)H) \\ &= \varepsilon_{\text{Ind}_H^G X}((g, (e_G, x)H)H) \\ &= g \cdot (e_G, x)H \\ &= (g, x)H\end{aligned}$$

なので,  $\varepsilon \text{Ind}_H^G \cdot \text{Ind}_H^G \eta = 1_{\text{Ind}_H^G}$  である. また, 任意の  $G$  集合  $Y$  と  $y \in \text{Res}_H^G Y$  に対して,

$$\begin{aligned}(\text{Res}_H^G \varepsilon \cdot \eta \text{Res}_H^G)_Y(y) &= \text{Res}_H^G \varepsilon_Y \circ \eta_{\text{Res}_H^G Y}(y) \\ &= \text{Res}_H^G \varepsilon_Y((e_G, y)H) \\ &= e_G \cdot y \\ &= y\end{aligned}$$

なので,  $\text{Res}_H^G \varepsilon \cdot \eta \text{Res}_H^G = 1_{\text{Res}_H^G}$  である.

したがって, 定理 2.2 より  $\text{Ind}_H^G \dashv \text{Res}_H^G$  を得る.  $\blacksquare$

制限関手と誘導関手は, Mackey 関手の圏の間の制限関手  $\text{Res}_H^G$  と誘導関手  $\text{Ind}_H^G$  を導く. このとき, 実は  $\text{Ind}_H^G \dashv \text{Res}_H^G \dashv \text{Ind}_H^G$  が成り立っている (Thévenaz, Webb [3, 命題 4.2]). 左随伴関手は余極限を保ち, 右随伴関手は極限を保つから, Mackey 関手の間の引き戻しや直和は, 制限や誘導によって本質的には変化しないことが分かる.

## 参考文献

- [1] Serge Bouc. Burnside rings. In Michiel Hazewinkel, editor, *Handbook of Algebra*, Vol. 2, pp. 739–804. North Holland, 2000.
- [2] Saunders Mac Lane. *Categories for the Working Mathematicians*. No. 5 in Graduate Texts in Mathematics. Springer, second edition, 1998.
- [3] Jacques Thévenaz and Peter J. Webb. Simple mackey functors. *Rend. Circ. Mat. Palermo* (2) *Suppl.*, No. 23, pp. 299–319, 1990.

- [4] 中岡宏之. 『圈論の技法』. 日本評論社, 2016.